来年のことを言うと鬼が笑う

札幌市医師会
札幌南一条病院
占部和之（うらべかずゆき）

新年明けましておめでとうございます。この原稿を書いている現在は10月の最終週、緊急事態宣言、次いで飲食店の時短要請も解除となり、少しの安堵と漠然とした不安の中にいます。所謂、第６波が大きなものでなく、皆様が平静に診療できていることを今から切望しています。

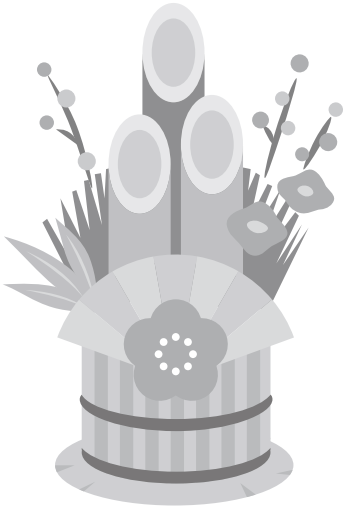
久し振りに、いつもの友人と食事に出て副題のような話になった。よく“来年のことを言うと鬼が笑う”と言う。“３年先～”と言ったり、笑うのも“烏”という地域もあるようだ。特に西日本では、昔話でその類を言われることが多く、江戸中期以降に“上方いろはかるた”で採られて広まったことを後から知った。皆さんが使い慣れているように、将来のことは前もって分からないから、あれこれ言っても仕方ない、予知できないことを言うと鬼ですら、あざ笑ってしまうという意味で使われる時が多く、怖い鬼でも笑ってしまうくらい滑稽なことだと、“捕らぬ狸の～”のような否定的な言葉に捉える場合が多いようだ。しかし最近は、必要以上に心配するのは止めよう、大丈夫だからという肯定的な捉え方も多いようで安心する。ただ、鬼は先のことが分かっていて右往左往する人間の様を笑っているという解釈もあるようで、加えて今回、対義語が“昔のことを言えば鬼が笑う”ということを知って、なんだ、鬼も結構笑うじゃないかなどと思ってみたりする。

今回のCOVID-19は、広義の自然災害に分類されるが、天災と同じくその厄介な点は、加害、被害の関係性の中で加害者を明確にし難い点にあると言うのだ（ウイルスが悪いと直接怒りをぶつけるわけにも）。有史以来、人間は鬼となる疑似加害者を作り出して、誰かのせいにしようとするものだと。魔女狩りなど、違う立ち位置の我々から見れば、なんと愚かなと思うが、“まともな”人が行い現在も行われている。理由の諸説のひとつに災禍反応説があって、まさに今である。誰かのせいにすれば、そこに“不寛容”が生まれ、加害者の特定は差別、排他と同義語に思える。数日前、皇族の結婚が発表された。彼らが卓越した人間とも思えないが、直接他人に危害を加えただろうか。日本（世界？）も、もう“ロイヤル”を生まれながらに税金でご飯が食べられる人くらいに思っているのだろうか。共に維持してくれる“いいとこのボン”を探すのももう大変だ。

昨年来、鬼を扱った漫画が随分流行った。子供でも、むしろ子供だからこそ人が鬼になり得ることも、それが悲しいことなのも分かるらしい。友人の先輩作家が“あの漫画が初めて、鬼は殺せないことを示したんだよ”と言ったそうだ。

今日、いつもより箸が進まない友人の様子をみて、鮨屋の大将が突然、肉じゃがを供してくれた。勢いよく食べて笑いながら一言、「いや～“来年の～”には、もう一つ意味があってねえ、みんな自分の心の中に鬼がいることにちゃんと気付いてないと、心の中の鬼に笑われてしまうよ」と。

仕事の鬼とか、芸術の鬼とかいう言葉がある。この場合、人間離れした力の持ち主というより、ある一つのことに精魂を傾ける人の意味で使われる。家庭、他人を省みないという否定的な面で捉えることもあるが概ね肯定的で、この鬼も人だ。コロナ禍で私は大きな貢献ができた訳ではないが、日本中、いや世界中の仕事の鬼によって医療が持ちこたえられた面があるのは事実と思う。いい鬼もいるのだ。

善と悪が経済にもあると説く学者の話に至った。経済も単なる数式、分析ではなく、倫理的な規範、“善と悪”の価値判断と不可分であると。大仰に真の豊かさなどと言う気はないが、成長・効率至上主義が公正な分配につながるとは流石に思えない。見えざる手とアニマル・スピリットを持つ人。成長と分配と言っている総選挙が明後日だ。

今年も春になれば、感染の状況に関わらず同じようにきれいな桜が咲く。去年、ある桜の名所で“例年以上にきれいに咲きました”とのニュースを聞くと、下で宴会をする我々も桜には鬼なのかもしれない。それでも、春には最低限の花見をして、還暦になる秋の学会シーズンには“団子”を現地参加で食べられたらと思う。人も鬼も、そして花も咲っていられる１年であることを切に願う。